

## 福島・泉平館跡

いざみひらたて  
跡

1 所在地 福島県原町市泉字館腰・町畑

2 調査期間 一九九五年(平7)八月～一九九六年三月

3 発掘機関 原町市教育委員会

4 調査担当者 堀 耕平

5 遺跡の種類 居館跡

6 遺跡の年代 近世初頭

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は新田川左岸の沖積地に立地する平館である。郭は東西・南北

北約七〇mを測る。幕末に編纂された相馬藩の地誌『奥相志』に記載された相馬一族の長、岡

田氏の居館と推定されている。その使用期間は慶長二年(一五九七)から同一年までである。

調査は県営圃場整備事業に伴い、掘削を受ける南側約三分の一、約九五〇〇m<sup>2</sup>について実施した。調査地

は、過去に削平されているため、郭から発見された遺構はなく、郭の東・南・西を跨む幅一一一四mの堀が確認された。また、東側と南側で土橋状の遺構と、その付近に橋脚に関連すると推定される木柱列が検出された。

遺物のほとんどは堀から出土しており、瀬戸・美濃・常滑・青磁などの陶磁器片、下駄・漆椀・曲物などの木製品、渡来錢、火縄銃の火皿などの金属製品、鹿角・馬歯などの動物遺存体がある。

墨書及び墨痕が確認できた資料は一七点出土している。(1)～(5)は一組で堀南側、土橋状遺構付近からの出土である。(6)～(11)も一組で堀南東角からの出土である。(12)～(15)、(16)(17)は堀東側から近接して出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) □ ○

229×27×3 061

(梵字カ)

(2) ○

(143)×24×2 061

(梵字)

(3) ○

158×26×3 061

(梵字)

(4) ○

230×27×3 061

(梵字)

(5) ○

233×24×3 061

(梵字)

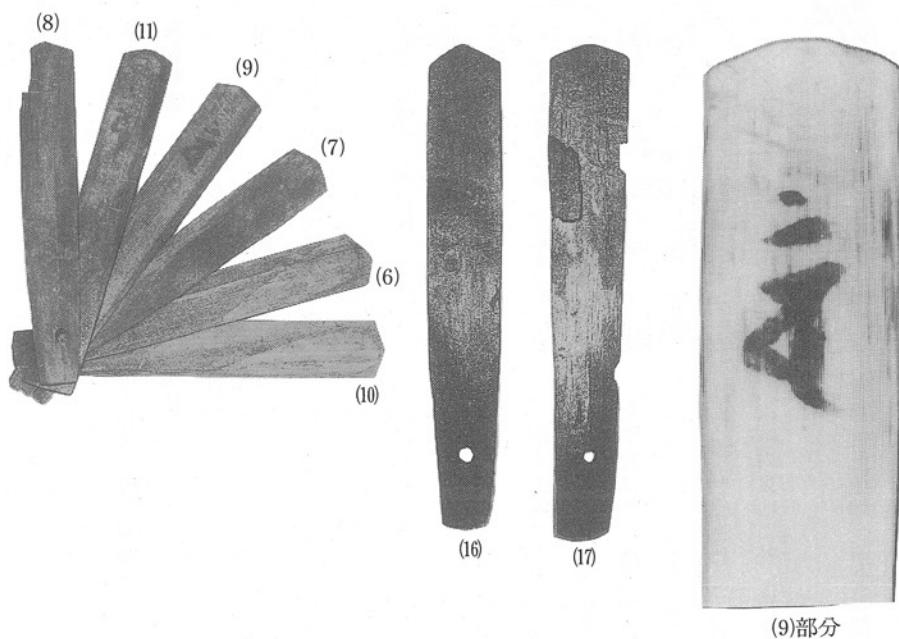
(6) ○

228×34×3 061



1996年出土の木簡

(7)	「(梵字) ○」	228×35×3	061
(8)	「(梵字) ○」	226×35×3	061
(9)	「(梵字) ○」	236×34×3	061
(10)	「(梵字) ○」	227×36×3	061
(11)	「(梵字) ○」	229×33×5	061
(12)	「(梵字) ○」	233×34×3	061
(13)	「(梵字) ○」	231×36×3	061
(14)	「(梵字) ○」	234×36×4	061
(15)	「(梵字) ○」	232×33×3	061
(16)	「(梵字) ○」	231×36×3	061
(17)	「(梵字) ○」	232×37×3	061



(1)～(5)は下方を木釘で留めている。(5)に木釘が残存している。墨書部分のない破片が一本あり、本来は六本一組と考えられる。(6)～(11)も一組で、同様に木釘で留めている。(8)～(11)に木釘が残存。(12)～(17)は法量・留め穴の形が同様であることから、六本で一組と考えられる。形状はいずれも長方形の板材の上方を山形に整え、やや幅を狭

めながら下方に至り、下端は直截している。

墨書が肉眼で確認できたのは、(1)～(5)(9)(11)(12)(16)で、他は赤外線観察及び墨痕により文字が確認できた。文字は各本につきすべて片面のみに一字ずつ記され、(1)を除き種子はすべて「」（金剛界大日如來）と確認できる。発掘時に二次的な削りを受けた(1)も同じ種子と推定される。

今回出土した資料は、形状・法量・種子に共通性があり、性格としては今のところ筆塔婆あるいは呪符の類と想定される。

本資料については國學院大學の千々和到氏、元興寺文化財研究所の藤澤典彦氏のご教示を得た。

(堀  
耕平)

## 宮城・山王遺跡

1 所在地 宮城県多賀城市南宮字八幡・町・伊勢

2 調査期間 一九九五年（平7）四月～一二月

3 発掘機関 宮城県教育委員会

4 調査担当者 加藤道男・斎藤吉弘・村田晃一・早川英紀・八嶋伸明・星清・東理浩明

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 弥生時代～江戸時代

## 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(仙台)

山王遺跡は奈良・平安時代を通じて陸奥国府であった多賀城跡の南西部に位置する。砂押川と七北田川によって形成された標高五～六mの東西に長い自然堤防上に立地している。その北側は低湿地、南側は微高地と低湿地が複雑に分布して